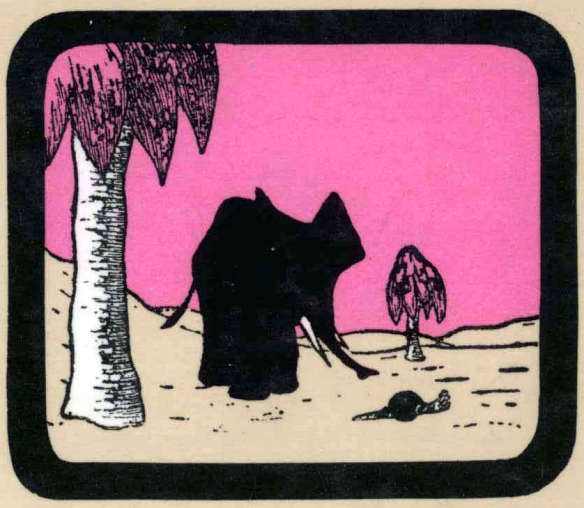
ショヴォー氏とルノー君のお話集 5

ふたりはいい勝負



レオポルド
ショヴォー
さく

出口裕弘
やく

ショヴォー氏とルノー君のお話集

—5—

ふたりはいい勝負

文と絵

レオポルド・ショヴォー

訳

出口裕弘（でぐちゆうこう）

福音館書店

LES DEUX FONT LA PAIRE by Léopold Chauveau
Illustrations© by Léopold Chauveau 1937, succeeded by Olivier Chauveau 1940.
Rights of reproducing illustrations for Japanese edition were given to Fukuinkan-Shoten, publishers in 1985. Arranged with copyright-holder.

ふたりはいい勝負
レオポルド・ショヴォー 文・絵　出口裕弘（でぐちゆうこう） 訳
発行所　福音館書店
〒113 東京都文京区本駒込6－6－3
電話　営業部（03）942－1226
編集部（03）942－2081
振替　東京5－117645
1987年1月30日発行

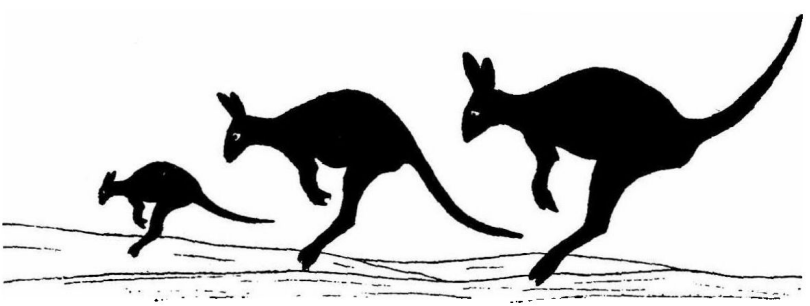
印刷　精興社／製本　黒岩大光堂
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社宛ご送付ください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
NDC950　350P　20×14cm　ISBN4-8340-0109-1

ふたりはいい勝負

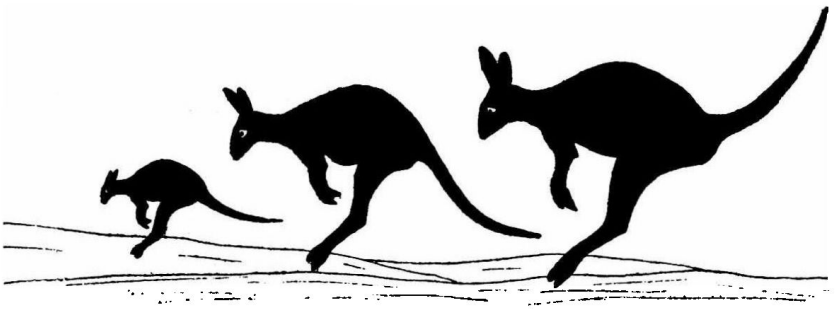
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

もくじ

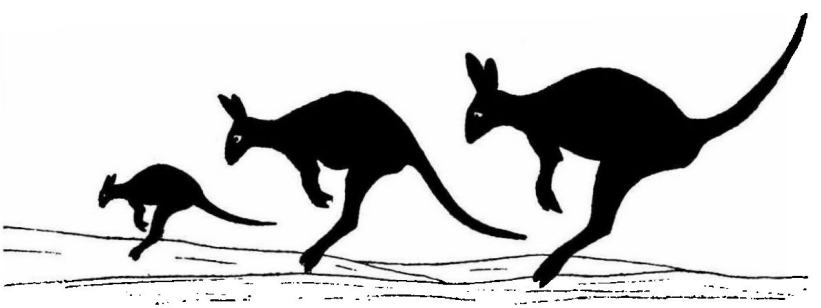
三びきのカンガルー――7
ぜんぜん、なににも似ていなかった動物の話――23
あべこべの話――36
ありそうもなかった話――47
リュクサンブール公園のノミ――66
同じノミの、いたずらと大手柄の話――77
ぼくの話――88
一度も、なんにもおこらなかった男の話――96
かわいそうな小さな船が、沈没した話――105
いたかもしれないゾウの話――111
オオヘビとカメ――116
ふしぎな釣りびと――124
小さな、とても小さな男の話――131



木こりと森の話――139
古い塔の話――147
ハツカネズミをこわがったネコの話――153
ネコと小さな女の子と焼肉の話――161
オウムの王さまの話と、もうひとつの話――166
パン・デピスの子ブタ――177
九・九の練習――185
シャンゼリゼ大通りのクジラ――192
水を切って進む小さな船――197
目がよく見えなくなったゾウの話――199
そのゾウの鼻は、みんなと同じ鼻だった――205
黒人の王さまと、おつきの医者――209
ほうきおばさん――218
大麦あめ――225
バターさん、マカロニさん、チーズさん――231



七才から、八才へ——237
まっすぐ、くずかごへ！——243
どこかへ飛(と)んでった平手打ちの話——250
ゆううつ——260
足と、石ころの話——263
カタツムリのひっこし——271
木でできたワニ——282
うちの子と、よその子——288
塀(へい)の上のメンドリ——300
故障(こしょう)——316
年をとった婦人(ふじん)の肖像画(しょうぞうが)——319
半熟(はんじゅく)たまご——328
どうして、学校へ上がるの？——333
年をとった子ども——340
じゃあね——343



装丁デザイン――堀内誠一

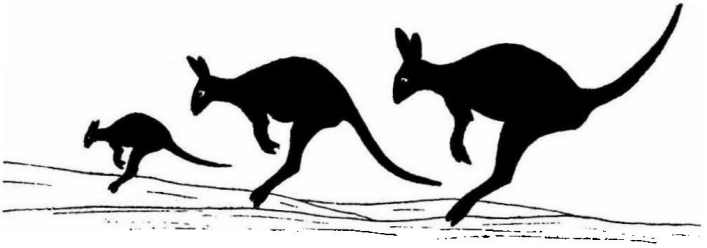
三びきのカンガルー

わたしは、膝の上に一冊、本をひろげたまま、ひじかけいすにすわっていた。

ねむりこけていたわけではないようだ。わたしをよぶ声が、耳に入った。

「パパ！」

声は、いすの下から――いや、ひょっとすると、うしろがわから――、いずれにしても、なにがどうなっているのか、わたしにはさっぱり見えないあたりから、聞こえてきた。



ルノー君は、どうやら、なにか、してはいけないことをして、遊んでいたようだった。見ないほうがいい。知らないでいるほうがいい。

いすにじっとしたまま、わたしは答えた。

「なんだい」

ルノー君の声は、あいかわらず、下か、うしろのほうから聞こえてくる。

「ぼく、お話をこしらえちゃった」

「へええ」

わたしの左ひじの下から、ぬっと頭が出てきた。ルノー君は、からだを起こして、わたしの両脚のあいだに、するっとすべりこんできた。

両方の腕を一本ずつ、わたしの膝にのせて、わたしを真正面からじっとみつめ、とてもまじめな顔をして、こういった。

「すっばらしいお話なんだ」

「話してごらんよ」

待ってましたとばかり、ルノー君は話しはじめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あるところに、カンガルーの奥さんがいました。おなかのふくろの底のほうに、穴があいてしまいました」

わたしは、話のつづきを、じっと待った。だが、それっきりだった。ルノー君は、それ以上、なんにもいわないのだ。

しばらくして、わたしはたずねた。

「それで？」

「それで、おしまい。カンガルーの奥さんは、おなかのふくろの底のほうに、穴があいてしまいました。それだけ」

「おまえ、まさか、それがお話だっていうつもりじゃないだろうね」

「お話でないんなら、いったい、なんだっていうの」

「お話のはじまりっていうものだろう、それは。お話じゃあないよ。ほんとうのお話にするつもりなら、ちゃんと、おなかのふくろに穴のあいた、カンガルーの奥さんの身のうえに、そのあとどういうことがおきたか、話してくれなくちゃ」

「カンガルーの奥さんはね、おなかのふくろに、穴があいたの」

「それはもう聞いたよ」
「どういうことがおきたか、ちゃんと話さなくちゃいけないんでしょ」
「おまえのそのお話がすばらしいなんて、パパには、とてもじゃないが、思えないね。すばらしいどころか、くだらないって、いいたいくらいだ」
「パパのお話のことを、ぼくがそんなふうにいえると思う？」
「へーえ、おまえでも遠慮することがあるのかい」
「パパ、ぼくはね、いつもいつも、いいたいことをいってるわけじゃないんだよ」
「ありがたいことだね」
「それに、ぼくのお話、ぜんぜん、くだらなくなんかないよ。だって、カンガルーの奥さんの身のうえには、もっともっと、いろんなことがおきたんだもの」
「それを話してくれなくちゃ」
「ぼくに、話せるわけないじゃないか。たしかに、カンガルーの奥さんの身のうえには、もっともっと、いろんなことがおきたよ。でも、なにがおきたのかは、ぼくは知らない。ぼくが知ってるのはね、カンガルーの奥さんの、おなかのふくろの底に、穴があいたって

ことと、なんでも、ふくろへ入れると、みんななくなっちゃうってこと、それだけさ」
「きっと、あれだろ、おまえは、どうしてふくろがやぶけたのかも、知らないんだろ」
「底に穴があいてたからさ」
「あきれたやつだな。いったいだれが、そんな穴をあけたんだい」
「そんなこと、だれにもわからないよ」
「パパには、わかってるよ」
「あ、また、へんなお話を作ろうって考えてるね、パパ」
「だっておまえは、ひとりじゃ、お話、作れないんだろう」
ルノー君は、むっとなって、それきり口をつぐんでしまった。わたしのほうが、さきに口をひらくことになった。
「おまえのカンガルー夫人には、息子がいたんだ。おなかのふくろに、すっぽりとおさまってた」
ルノー君は、そっけない調子でいった。
「そんなはずないよ。ふくろには、穴があいてたんだもの。穴から落っこちてるはずだ

よ」

――そのころは、まだ、ふくろには穴があいてなかったのさ。カンガルーのぼうやは、ふくろから、絶対、外へ出ようとしなかった。まだ、あんまり小さすぎたものでね。ときどきふくろから顔を出して、目のとどくかぎりのものを、じっとながめるのさ。なにもかも、カンガルーのぼうやには、おもしろかった。なにしろ、なにもかも、はじめて見るんだからね。虫が一ぴき、ぶーんと飛んでくる。木の葉が一枚、ひらひらと落ちてくる。ほこりが、くるくるっとうずをまいている。それがみんな、ぼうやには、目あたらしいわけだ。こうして、ぼうやは、だんだん大きくなっていった。おかあさんのふくろのなかで、だんだんに、大きなかたまりになっていったわけさ。おかあさんカンガルーは、そのかたまりの大きさで、ある日、ついに息子が、あんよを習う年になったと考えた。おかあさんカンガルーは、前足を使って、ふくろの入口を大きくひろげた。そして、ふくろに口を当てて、大声でよんだ。

「さあ、ぼうや、出てらっしゃい。さあさあ」

カンガルーのぼうやは、うたがいぶかかった。

〈ぼくに、どうしろっていうんだろう〉
ぼうやは、できるだけ深く、ふくろのなかへもぐりこんだ。
わたしは、指を一本立ててみせて、こういった。
「ふくろにはまだ、穴があいてなかったんだ。わすれないでくれよ」
それから、また話しはじめた。
おかあさんカンガルーは、肩のつけねまで、ふくろのなかへ腕をさしこんで、息子のしっぽをぎゅっとつかみ、ぼうやを外へ引っぱり出した。草の上へそっとぼうやをおいて、きびしい声でこういった。
「おまえの年ごろには、おかあさんは、もう、ちゃんと歩けたものだよ」
おかあさんカンガルーは、息子に、第一回めの、あんよのおけいこをさせた。
カンガルーにしてみると、歩くというのは、まったくの話、たのしいものじゃない。ひどくやりにくいうえに、なんともさまにならないのだ。長すぎるしっぽと、短すぎる前足で、同時にからだをささえる。すると、お尻が、ぐっと高くせりあがり、鼻さきは、地面すれすれになる。こうしておいて、あと足を前へ出す。これで、やっと一歩、歩いたこと

になる。この動作を、何回でもくりかえすわけだ。

カンガルーのぼうやは、こんなかっこうで歩くのは、がまんならないと思った。でも、カンガルーは、ほかのやりかたでは歩けないのだ。ぼうやも、みんなと同じようにして歩くより、しかたがなかった。

カンガルーのぼうやは、おかあさんによばれても、けっして顔を出そうとしなかった。だから、おかあさんカンガルーは、いつもいつも、ふくろのなかのぼうやをさがし、しっぽをつかんで、外へ引っぱり出すほかはなかった。

引っぱり出すとすぐ、おかあさんは、ぼうやに二発、平手打ちをくらわせた。一発は、よんだのに出てこなかった罰、もう一発は、元気を出しておけいこをするよう、はげますためだった。

おけいこのあいだに、いつもぼうやは、さらに何発か、平手打ちをくらうことになるのだった。

そうはいっても、やがてぼうやも、あんよができるようになった。おかあさんカンガルーは、こんどは、ジャンプを教えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com